

「与右衛門、米子へ行つて、もつと勉強をし、りつばなぎむらいにならないか。」

与右衛門さんは、いっぱい勉強がしたかったので、米子に行きたいと思いました。

与「はい。私は勉強をしたいと思いません。米子に行きたいです。」

⑬父「与右衛門は、行つて勉強をしないと答えたが、大丈夫だろうか。まだ、あんなに小さいのに、かわいそうな気がするな。」

母「ええ、私も心配でたまりません。でも、おじいさんが言われるように、しっかりと勉強することは大切だと思います。与右衛門は行きたがつています。あの子は、きつとがんばつてくれますよ。」



お父さんとお母さんは、まだ小さい与右衛門と別れるのは、とてもつらくさびしいと思いました。でも、きつとりつばなぎになつてくれると信じて、米子へ行かせることにしました。

⑭出発の日の朝になりました。与「お父さん、お母さん、これからおじいさんと米子に行きます。そ

して、いつしうけんめい勉強します。どうぞ、元気で過ごしてください。」

父「米子では、皆さんを先生だと思ひ、しっかりと勉強しなさい。」

母「りつばなぎになれるよう、がんばりなさい。体を大切にしてくださいね。」

与「はい。お父さん、お母さん、元気に過ごさせていただきます。」



では、行つてまいります。」

お母さんの目から、いっぱい涙があふれていました。

⑮長い旅をして、ようやく着いた米子は、にぎやかな町でお城がありました。おばあさんは、たいへんやさしい人で、与右衛門さんが来たことを、心から喜んでくれました。与右衛門さんは、勉強が楽しくてたまらず、いつもけんめい習いました。一年



から喜んでくれました。与右衛門さんは、勉強が楽しくてたまらず、いつもけんめい習いました。一年

もたたないうちに、手紙を書いたり、むずかしい本を読んだりできるようになりました。

米子で、一年ほど過ごしてから、今度は、大洲（今の愛媛県）に移り住みました。与右衛門さんは、大洲に行つてからも、人の何十倍も勉強しました。学問だけでなく、正しい行いができる人になりたいと考え、ますます勉強にせいを出しました。

そして、中江藤樹先生は、『近江聖人』とたたえられ、今も人々に親しまれています。

## ◎二作目以降の作品です

- 二 「車が田に落ちた」
- 三 「馬方又左衛門」
- 四 「あかぎれこうやくの話」
- 五 「追いはぎと先生」
- 六 「大野了佐を教える」
- 七 「そばやのかんぼん」
- 八 「うそはつけぬ」
- 九 「熊沢蕃山の入門」
- 十 「脱藩の道」
- 十一 「小川村のくらし」
- 十二 「遺徳を守る人たち」
- 十三 「久子夫人と先生」
- 十四 「志を立てる」
- 十五 「賊と戦う」
- 十六 「每朝かゆを炊くお母さん」（『鑑草』より）
- 十七 「孟子とお母さん」（『鑑草』より）
- 十八 「竹生島での出会い」

## ひじりの声

上田 藤市郎

藤樹書院では、新年一月十一日の講書始めで「孝経」が拝誦される。その内容は、指導者たる者に、誓つて徳を実践することを求めている。指導者の率先実行が末端の庶民に波及し、徳治政治が実現するとしている。藤樹先生を含めて江戸時代の武士階級は約七%で、まさに指導者だったから、責任ある自覚が求められたであろう。このような内容が書かれてあることは時代を超えて、中国、日本でもそのような指導者が少ないからこそ求められていたのであろう。現代日本の政治スキャンダルに見るように、国、地方を問わず、政治家が、金銭、権力、地位に心を奪われ、失脚する例が後を絶たない。また事実が露見した際の、弁解の醜さも甚だしいものがある。選挙運動の際の平身低頭ぶり、当選後の傲慢不遜の差に驚く。孝経では、庶民は指導者を選ばなかつたので、庶民は指導者に服するものとしている。現代民主主義社会では、この指導者を選ぶのが有権者となつたので、有権者が選出責任を問われるという現実がある。有権者の仁徳、正義感、人間性、清廉、謙遜、見識の豊かさが社会を創造していくのである。